七〇年闘争を担う自治会共闘運動の強化のために

「七月自治代」によせて

共産主義労働者党学生対策部

四月以降、激烈を極めたわれわれの闘争は、大衆運動に対する真のヘゲモンとして、いよいよ強化されつつある。自治会指導権の部分的敗退も決してわれわれの組織的理論的退化を生み出すものではない。われわれは、一つの自治会共闘運動の後退を生み出すような自治会主義運動がこれからもそのようなものとしては創り出さないであろう。自治会共闘運動は、ついに今春の闘争過程に名実共に、七〇年戦線を担う、真の方向性を、圧倒的な運動の実例をもって明らかにした。闘わぬ民青、分解する三派、動揺してわれわれに色目を使いつつ右旋回する革マル派…。これら一切の特徴的諸事情は自治会共闘運動が統一理念を語るレベルを完全に乗り越えさらに一層前進させるべき地点に到達していることをあまりにも明解に言い表わしているといえよう。われわれは必然として、かつ自治会共闘運動における、真の組織的理論的ヘゲモン、なによりも実践的なそれであることに変りはないし、今春の三・二八～四・二六～五・一にかけての沖縄・王子、メーデー闘争、そして六・一五闘争をあらゆる意味において主体的に担い続けてきたのがわれわれであったという、この明白な事実は、七月自治会代表者会議にむけて、われわれのなすべき任務の重さと共に、一定の方針を明らかにすることを要求している。党学対部は、かかる背景の下に、「七月自治代」にむけて、若干の方針を提起することにした。

全国の学生党員は、「七月自治代」に全力をあげて結集せよ！あらゆる活動家を結集させよ！

七〇年安保闘争への推進をかちとった今春の闘争を鋭く分析し、一切の日和見主義を断然に止揚すべく、本格的な七〇年安保闘争論をもって結集せよ！

1　七月十五、十六日、神戸大学教養学部で、八月原水禁、十月二十一日国際反戦労学ゼネスト推進のための七月自治代が開かれる。六六年十月二十一日国際反戦デーを突破口に、十二月三派系「全学連」がデッチ上げられる動向の中で、一府県学連、立命館一部学友会アピールに応え課題別自治会共闘運動方針の全国的第一歩を、戦線統一の任務を担いつつ印して以来ベトナム反戦・沖縄奪還、安保破棄の課題別自治会共闘運動は、現段階、時限共闘としてであれ、柔軟性、開放的原則性を銘柄として、「第二期学生運動」の自覚的推進部隊としての機能と役割を発揮して来た。砂川・羽田・佐世保・王子現地自治会共闘運動は、東京「都学連」の実体形骸化、京都「府学連」の機能マヒの中で、東京、京都における事実上恒常的自治会共闘運動の推進へと発展し、この四～六月闘争の中で六・一五安保粉砕・佐藤打倒の集約される新たな七〇年安保破棄の実践的部隊の本格的登場を関西一府県学連、立命一文自治会、東京における法政自治会を軸に展開し得たのである。

いま佐世保エンタープライズ寄港阻止闘争と四～六月闘争への継続と六・一五安保破棄・佐藤打倒反戦・反安保労学市民の一大決起と九月～十二月闘争、一〇・二一労学ゼネストへと追い上げるべく全国の自治会共闘運動推進部隊の総括、情勢・方針の強固な意志統一が求められており、わが党学生党員の任務と役割が一層重要となっている。とりわけわが広義の意味の機革派諸潮流学生運動内部の市民主義的性格と三派系への傾斜を強めることをもって「佐翼機能マヒ」を付与せんとする二様の日和見主義的傾向が色濃い時、わが学生共産主義者の反独占・民主主義を連帯する民主主義・社会主義への自覚的一翼としての学生運動を真に七〇年安保闘争の戦線主体として登場せしめる原則性と自己定立の作業は、この「七月自治代」の中に、もっとも重要な課題として求められていると言わなくてはならない。関西地方へのブント・中核派の「なぐり込み的」府学連分断策動が強まり、さらに民学同右派諸君の民青系諸君との癒着が自に余る状況を呈した大阪学生運動は、彼らの七〇年安保闘争の戦闘的翼への敵対性、犯罪性を決して許すことは出来ない作業となっている。

「七月自治代」はかかる状況の中で、秋一〇・二一闘争、来春の現地羽田大動員による佐藤訪米阻止闘争と激烈きわまる七〇年安保粉砕の激動と危機の時代に身を呈さなければならないことをわれわれは印している。

2　六五年二月七日北爆開始と同時に雪崩布告、ベトナム侵略戦争は核戦争の引き金がタカ派から主張されるまでに至った。六五～六六年、日本反戦闘争もかかる性格から「外在的ベトナム」の領域でありその後、次第にベトナム侵略戦争の激化が引き起す侵略加担構造の産み出す諸矛盾は"銃後の反乱"としての帝国主義本国の具体的な「内なるベトナム」との対決、体制的変革へと前進し得る過程であった。六七年、砂川・羽田・佐世保・王子闘争はかかる「内なるベトナム」との対決であり、帝国主義侵略加担構造との全面的対決であった。それは同時に支援と抗議のカンパニア的性格から激烈な現地闘争を軸に全国的反戦・反政府闘争へと波及し、ベトナム侵略加担と安保条約との関係をますます明らかにし、ベトナム反戦闘争は「内なるベトナム」との対決＝七〇年安保粉砕と「佐世保エンター闘争を通じた」政治部隊の本格的登場を告げると共に四月ジョンソン声明がベトナム戦中とベトナム戦後の戦術的転換を余儀なくさせられる局面で沖縄奪還、ベトナム反戦・反政府闘争へと継続し、国会をめぐる佐藤打倒と結合した国会攻防戦に転化したのである。

国際反戦闘争、とりわけ米帝心臓部では五八年ドル危機の顕在化以降、ケネディ政権下のたて直しと「ゆたかな社会構想」そしてその継続を誇ったジョンソン政権下の公約は、ベトナム侵略の全面的対応とベトナム危機の進行の中で、ドル危機の加速度的進行を余儀なくさせ、ポンドの世界通貨の崩壊の決定的局面を引き起こさせ、アメリカ国内の諸矛盾の一挙起の激動の時期を見すえて、情勢・方針を確立しなければならない。今夏の原水禁が広島―長崎―沖縄を結び、日本の核武装阻止・沖縄奪還・核安保粉砕闘争として闘われる意義は、極めて重要といわなくてはならない。だが、原水禁一大結集はカンパニア運動に終らせることなく、組合動員・学生総結集は、明確に一〇・二一労学反戦・反安保・沖縄奪還ゼネストを圧倒的に成功させるための強固な意志確認とし、労働者本隊の今秋の反戦・反安保闘争への全面的登場でなければならない。そして原水禁国民会議が、この間の実践的方向性をさらに高め、七〇年安保破棄勢力の本格的登場を組織的にも打ち固めなければならない。

われわれはベトナム反戦・佐藤侵略加担粉砕の闘いと核戦争の危険性を阻止し日本の核武装阻止への重要な道であることを主張し原水禁運動の固有の任務を果すと共に現状に対応する反核闘争の結合を訴えて来た。そのことは一定の原水禁国民会議の国際反戦デーへの参加と、羽田・佐世保・王子闘争への取り組みへの前進的萌芽に見ることが出来るだが今や「ベトナム以降」の戦略的転換期の中で"沖縄"をめぐる日米帝国主義同盟の画策が陰然・公然となされている中で、その鋭い"槍"沖縄奪還闘争は、単に"B52撤去、沖縄の永久基地化粉砕"の闘いにとどまらない。沖縄奪還・安保破棄の一体となったスローガンが全面的提起され、安保を"闘う原水禁"としての脱皮が要求されている。

"七〇年安保を核安保としての側面から闘っていく原水禁"としての今年の性格はあくまでもかかる七〇年安保粉砕の有機的統一戦線の自発的一翼として登場することであり、われわれはこの大会を契機として、一〇・二一国際労学ゼネスト十一月沖縄王席公選制にからむ沖縄闘争を、来春一月佐藤訪米阻止へと追い上げる。七〇年安保推進、沖縄永久核基地政権佐藤打倒へと集約し、本格的なベトナム―沖縄―安保の過程的闘いから集約的一大攻防戦を学園国会、羽田へと打ち固めていかなければならない。

4　この半年の反戦・反安保・沖縄奪還の政府への正面攻防戦は、現地全人民的政治闘争の続発する最近の安保条約下のうみ出す日本の現実は、明確に続発する傾向と安保拠点の撃破の質的前進の上に、一大"決戦"の激烈な時代を用意している。全国自治会共闘運動を推進して来たわれわれは、この試練を飛躍のための契機として大衆的・戦闘的高揚をかちとらなければならない。そして、七〇年安保粉砕の闘いにとどまらない。沖縄奪還・安保破棄の一体となったスローガンが全面的提起され、安保を"闘う原水禁"として脱皮が要求されている。

"七〇年安保を核安保としての側面から闘っていく原水禁"としての今年の性格はあくまでもかかる七〇年安保粉砕の有機的統一戦線の自発的一翼として登場することであり、われわれはこの大会を契機として、一〇・二一国際労学ゼネスト十一月沖縄王席公選制にからむ沖縄闘争を、来春一月佐藤訪米阻止へと追い上げる。七〇年安保推進、沖縄永久核基地政権佐藤打倒へと集約し、本格的なベトナム―沖縄―安保の過程的闘いから集約的一大攻防戦を学園国会、羽田へと打ち固めていかなければならない。

この半年の反戦・反安保・沖縄奪還の政府への正面攻防戦は、現地全人民的政治闘争の続発する最近の安保条約下のうみ出す日本の現実は、明確に続発する傾向と安保拠点の撃破の質的前進の上に、一大"決戦"の激烈な時代を用意している。全国自治会共闘運動を推進して来たわれわれは、この試練を飛躍のための契機として大衆的・戦闘的高揚をかちとらなければならない。そして、七〇年安保粉砕の闘いにとどまらない。沖縄奪還・安保破棄の一体となったスローガンが全面的提起され、安保を"闘う原水禁"としての脱皮が要求されている。

"七〇年安保を核安保としての側面から闘っていく原水禁"としての今年の性格はあくまでもかかる七〇年安保粉砕の有機的統一戦線の自発的一翼として登場することであり、われわれはこの大会を契機として、一〇・二一国際労学ゼネスト十一月沖縄王席公選制にからむ沖縄闘争を、来春一月佐藤訪米阻止へと追い上げる。七〇年安保推進、沖縄永久核基地政権佐藤打倒へと集約し、本格的なベトナム―沖縄―安保の過程的闘いから集約的一大攻防戦を学園国会、羽田へと打ち固めていかなければならない。

自治会共闘などを結集した6・30王子野戦闘争

四、五、六月の闘争からなに

1　首都―関西、そして全国を結んだ六・一五闘争は疑いもなく四・二六以降の最大の反戦・反安保闘争の集約点であり、その色濃い市民主義的性格にもかかわらず、その胎内に七〇年闘争を担う戦闘的部隊のいくつかの萌芽を宿していた。

全人民的政治闘争は、羽田・佐世保―エンター闘争を経て、闘争の地域的爆発の連鎖の中で養殖された政治的エネルギーをテーマに、七〇年への上向的胎動を開始している。

"安保粉砕"、"佐藤を倒せ"は、全国にこだまし、七〇年への人民の政治スローガンは何かということを先験的に提示している。

"七〇年安保推進内閣＝佐藤打倒"これこそがそのスローガンである。

六・一五闘争を先験的に提起し、準備し、実行したのが労働者党は、この闘争の総括を、第一にヘゲモニー、第二に共闘組織のヘゲモニー、第三に闘争の質の三方面からとらえようと思う。

2　六・一五闘争の第一の特徴は、社・共・総評から自立した運動が、主として戦後世界帝国主義体系の位が崩壊する過程を死にもの狂いでくい止めんとし、ベトナム人民の一土地と自由と民族自決」の革命的事業を圧殺せんとする反革命干渉戦争であった。

五十万にのぼる米侵略軍と韓国、タイ、ニュージランド、濠州の派兵、そしてアジア唯一の帝国主義日本を間接侵略基地として、第一戦線＝米帝・かいらい軍、第二戦線＝アジア近隣諸国の派兵、第三戦線＝兵隊基地としての日本を、総体としてベトナム反革命干渉戦線として第二次大戦以上の爆弾投下と朝鮮戦争以上の米軍派兵を行なうことを通じてベトナム革命を圧殺せんとしたのである。このことは日々迫るベトナム侵略戦争のインドシナ全域への波及の危険性と、米帝の挑発と軍事冒険政策は、マクナマラ戦略であるが故の世界の反戦・平和勢力のかつてない広がりを示し、国際的反戦闘争も、ベトナム人民支援、米帝、侵略加担政府抗議のカンパニア的性格を強いものとして出発させていった。

六五～六六年、日本反戦闘争もかかる性格から「外在的ベトナム」の領域でありその後、次第にベトナム侵略戦争の激化が引き起す侵略加担構造の産み出す諸矛盾は"銃後の反乱"としての帝国主義本国の具体的な「内なるベトナム」との対決、体制的変革へと前進し得る過程であった。六七年、砂川・羽田・佐世保・王子闘争はかかる「内なるベトナム」との対決であり、帝国主義侵略加担構造との全面的対決であった。それは同時に支援と抗議のカンパニア的性格から激烈な現地闘争を軸に全国的反戦・反政府闘争へと波及し、ベトナム侵略加担と安保条約との関係をますます明らかにし、ベトナム反戦闘争は「内なるベトナム」との対決＝七〇年安保粉砕と「佐世保エンター闘争を通じた」政治部隊の本格的登場を告げると共に四月ジョンソン声明がベトナム戦中とベトナム戦後の戦術的転換を余儀なくさせられる局面で沖縄奪還、ベトナム反戦・反政府闘争へと継続し、国会をめぐる佐藤打倒と結合した国会攻防戦に転化したのである。

国際反戦闘争、とりわけ米帝心臓部では五八年ドル危機の顕在化以降、ケネディ政権下のたて直しと「ゆたかな社会構想」そしてその継続を誇ったジョンソン政権下の公約は、ベトナム侵略の全面的対応とベトナム危機の進行の中で、ドル危機の加速度的進行を余儀なくさせ、ポンドの世界通貨の崩壊の決定的局面を引き起こさせ、アメリカ国内の諸矛盾の一挙起の激動の時期を見すえて、情勢・方針を確立しなければならない。今夏の原水禁が広島―長崎―沖縄を結び、日本の核武装阻止・沖縄奪還・核安保粉砕闘争として闘われる意義は、極めて重要といわなくてはならない。だが、原水禁一大結集はカンパニア運動に終らせることなく、組合動員・学生総結集は、明確に一〇・二一労学反戦・反安保・沖縄奪還ゼネストを圧倒的に成功させるための強固な意志確認とし、労働者本隊の今秋の反戦・反安保闘争への全面的登場でなければならない。そして原水禁国民会議が、この間の実践的方向性をさらに高め、七〇年安保破棄勢力の本格的登場を組織的にも打ち固めなければならない。

われわれはベトナム反戦・佐藤侵略加担粉砕の闘いと核戦争の危険性を阻止し日本の核武装阻止への重要な道であることを主張し原水禁運動の固有の任務を果すと共に現状に対応する反核闘争の結合を訴えて来た。そのことは一定の原水禁国民会議の国際反戦デーへの参加と、羽田・佐世保・王子闘争への取り組みへの前進的萌芽に見ることが出来るだが今や「ベトナム以降」の戦略的転換期の中で"沖縄"をめぐる日米帝国主義同盟の画策が陰然・公然となされている中で、その鋭い"槍"沖縄奪還闘争は、単に"B52撤去、沖縄の永久基地化粉砕"の闘いにとどまらない。沖縄奪還・安保破棄の一体となったスローガンが全面的提起され、安保を"闘う原水禁"としての脱皮が要求されている。

"七〇年安保を核安保としての側面から闘っていく原水禁"としての今年の性格はあくまでもかかる七〇年安保粉砕の有機的統一戦線の自発的一翼として登場することであり、われわれはこの大会を契機として、一〇・二一国際労学ゼネスト十一月沖縄王席公選制にからむ沖縄闘争を、来春一月佐藤訪米阻止へと追い上げる。七〇年安保推進、沖縄永久核基地政権佐藤打倒へと集約し、本格的なベトナム―沖縄―安保の過程的闘いから集約的一大攻防戦を学園国会、羽田へと打ち固めていかなければならない。

この半年の反戦・反安保・沖縄奪還の政府への正面攻防戦は、現地全人民的政治闘争の続発する最近の安保条約下のうみ出す日本の現実は、明確に続発する傾向と安保拠点の撃破の質的前進の上に、一大"決戦"の激烈な時代を用意している。全国自治会共闘運動を推進して来たわれわれは、この試練を飛躍のための契機として大衆的・戦闘的高揚をかちとらなければならない。そして、七〇年安保粉砕の闘いにとどまらない。沖縄奪還・安保破棄の一体となったスローガンが全面的提起され、安保を"闘う原水禁"としての脱皮が要求されている。

"七〇年安保を核安保としての側面から闘っていく原水禁"としての今年の性格はあくまでもかかる七〇年安保粉砕の有機的統一戦線の自発的一翼として登場することであり、われわれはこの大会を契機として、一〇・二一国際労学ゼネスト十一月沖縄王席公選制にからむ沖縄闘争を、来春一月佐藤訪米阻止へと追い上げる。七〇年安保推進、沖縄永久核基地政権佐藤打倒へと集約し、本格的なベトナム―沖縄―安保の過程的闘いから集約的一大攻防戦を学園国会、羽田へと打ち固めていかなければならない。

8月反戦・反安保・沖縄奪還全国学生決起集会
10・21ベトナム反戦・反安保労学ゼネストめざし
7月学生自治会代表者会議

7月15・16日（10時―5時）　神戸大学教養学部校舎

議題
1. 自治会共闘運動の基本任務
2. 70年闘争をいかに発展させるか
①70年安保闘争論と自治会共闘運動の基本任務
②8月闘争、10・21労学ゼネスト、来春の佐藤訪米阻止のために
③組織的確立に向けて

責任自治会
桃山大学昭和町自治会
岡山大学医学部自治会